

## 中学生の社会的スキルと孤独感

金山元春・小野昌彦<sup>1</sup>・大橋 勉<sup>2</sup>・辻本雄一<sup>2</sup>  
大井閑代<sup>2</sup>・松井賀洋子<sup>2</sup>・辻本育宏<sup>2</sup>・吉田初子<sup>2</sup>

(2002年9月30日受理)

Social skills and loneliness in junior high school students

Motoharu Kanayama, Masahiko Ono, Tsutomu Ohashi, Yuichi Tsujimoto  
Shizuyo Oi, Kayoko Matsui, Ikuhiro Tsujimoto, and Hatsuko Yoshida

The purposes of this study were to examine the relationship between social skills and loneliness, and to contribute to prevention and intervention of loneliness in junior high school students. Questionnaires were administered to 83 students (45 males and 38 females). Correlation analysis showed that loneliness score was negatively related to the scores of peer reinforcement, social initiation, conflict resolution and assertion skills, and also positively related to the score of withdrawal behaviors. In addition, this study found gender differences in the role of social skills and problem behaviors on loneliness. Boys' loneliness was negatively related to peer reinforcement, social initiation, and assertion skills, and girls' loneliness was negatively related to conflict resolution skills, whereas both boys' and girls' loneliness were associated with withdrawal behaviors. These findings were discussed in terms of the context of social skills training.

Key words: social skills, loneliness, junior high school students

キーワード：社会的スキル、孤独感、中学生

### 問題と目的

これまで、孤独感が様々な不適応行動の誘因となることが多くの研究によって明らかにされてきた (Perlman & Landolt, 1999)。それにも関わらず、臨床への応用研究、すなわち孤独感低減のための介入法に関わる研究はほとんどないのが現状である (山口・佐藤・岸, 2000)。こうした現状の中、孤独感の生起メカニズムの理解と孤独感低減のための介入法の開発までを視野に入れたモデルとして、「社会的スキルの観点による孤独感の生起モデル」(相川, 1998)が提唱されている。

Peplau & Perlman (1982) は、孤独感を社会的相互作用における願望レベルと達成レベルの間のずれか

ら生じる不快感情であると定義した。この定義に従えば、孤独感は、願望レベルが達成レベルよりも高すぎるか、達成レベルが願望レベルよりも低すぎるかのいずれかによって生じることになる。このうち、達成レベルが低下する原因として社会的スキルの不足が考えられる (相川, 1998)。社会的スキルの不足は、対人場面での不適切な行動を生み出し、相互作用の機会を減少させる。その結果、達成レベルが願望レベルよりも低くなり、孤独感が生じると仮定される。

実際、相川らは、大学生を対象とした質問紙調査 (相川, 1992) や実験場面における孤独感の高い大学生の会話スキルの分析 (相川・佐藤・佐藤・高山, 1993) などを通して、孤独感の高い人は社会的スキルが不足していることを明らかにしている。さらに、相川 (1999) は、こうした知見に基づき、孤独感の高い大学生に社会的スキル訓練を適用することで彼らの孤独感低減に成果をあげている。このように、孤独感を社会的スキ

<sup>1</sup>奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター

<sup>2</sup>明日香村立聖徳中学校

ルの観点から捉えることは、孤独感の生起メカニズムを説明するだけでなく、孤独感を低減させるための介入手続きに有効な示唆を与えてくれるのである。

しかしながら、これらの研究は大人を対象としたものばかりであり、子どもの社会的スキルと孤独感の関係についてはほとんど検討されてこなかった。これは子どもの孤独感研究が、大人を対象とした研究に比して、長く注目されてこなかったことに一因があるろう。子どもの孤独感研究が乏しかった理由としては、一般に子どもは大人のように孤独感を感じないのではないかという前提があったためといわれている (Asher, Parkhurst, Hymel, & Williams, 1990)。しかし、多くの実証的研究の蓄積を経て、子どもの孤独感の概念が多く の点で大人の概念と類似しており (Asher *et al.*, 1990)、子どもの孤独感についても信頼性のある査定が可能であり (Terrell-Deutsch, 1999)、不満足な対人関係を継続的に経験すると、子どもであっても強い孤独感を抱くことが明らかにされるようになった。さらに、これまでの研究によって、子どもの孤独感 は時間を経ても安定しており (Renshaw & Brown, 1993)、いずれは粗暴な行動や学業不振など、子どもの不適応行動を引き起こす要因となること (Perlman & Landolt, 1999) が明らかにされている。

これらの研究結果が示唆するように、子どもの孤独感 は大人の孤独感と共通した性質を持っており、大人を対象とした研究において見出された知見は、子どもにも当てはまることが予測され、社会的スキルと孤独感の関係は、子どもを対象とした場合にも同様に確認されるものと考えられる。さらに、子どもの社会的適応に及ぼす孤独感の否定的な影響力を考えれば、子どもの孤独感を低減させるための介入法を開発することは、教育上、非常に意義のあることである。

こうした考えに基づき、金山・佐藤・佐藤 (2000) は、小学3年生を対象とした調査研究によって社会的スキルと孤独感の関係を検討している。その結果、社会的スキルと孤独感に有意な負の関係が見出され、とりわけ、「友だちを遊びにさそう」などといった社会的働きかけスキルと「ゲームをしている時にじゅんばんをまつ」などといった規律性スキルが孤独感と強く関係していることが明らかとなった。さらに、金山・後藤・佐藤 (2000) は、こうした知見に基づいて、学級単位による社会的スキル訓練を小学3年生に実施し、児童らの孤独感低減に有意な訓練効果を見出している。これらの研究結果から、社会的スキルは児童にとっても孤独感を低減させるための重要な資源であり、どのような社会的スキルが孤独感と関係しているのかを明らかにすることは、子どもの孤独感の予防や介入に有

効な手がかりを提供してくれるものと考えられる。

本研究は、これらの関係について中学生を対象として検討するものである。近年、深刻化する不登校や非行など、中学生の学校不適応の要因には共通して孤独感の影響が示されている (平田・菅野・小泉, 1999; 平田・渡部・相馬, 1998)。多くの研究者や教育関係者が指摘するように、社会的スキルの学習不足は今日の子どもたちにとって共通の問題となりつつある (河村, 1999)。こうした子どもたちの中から、今後、孤独感を強める子どもが出現することが十分に予測できるので、できるだけ多くの子どもが孤独感に対処するためのスキル教育を受けることは意義深いことであると考えられる。そこで、本研究では中学生の社会的スキルと孤独感の関係について検討し、中学生の孤独感を低減させるための介入手続きに基礎的資料を提供することを目的とする。

また、本研究では中学生の問題行動と孤独感の関係についても検討する。社会的スキルとは、ある環境の中にある特定の状況にふさわしい行動であって、かつ望ましい結果と関連している社会的行動であると定義されている (King & Kirshenbaum, 1992) が、社会的行動にはこうしたポジティブな側面と共に、ネガティブな側面すなわち問題行動が存在する。問題行動には非社会的問題行動と反社会的問題行動が含まれるが、本研究では前者を代表するものとして引っ込み思案傾向を、後者を代表するものとして攻撃傾向を測定した。孤独感が社会的相互作用の達成レベルの低下によって生じるとするならば、孤独感 は社会的スキルとは負の、問題行動とは正の関係を示すものと予測される。

## 方 法

### 測 度

#### 社会的スキル

渡邊・岡安・佐藤 (2002) が小学5年生～中学2年生を対象に作成した子ども用社会的スキル尺度29項目を使用した。仲間強化 (10項目)、規律性 (6項目)、社会的働きかけ (3項目)、先生との関係 (3項目)、葛藤解決 (4項目)、主張性 (3項目) の6下位尺度からなる、自己評定による4点尺度である。下位尺度ごとに項目得点を加算して合計点を算出した。得点が高いほど、それらの行動を多く示すことを意味している。

問題行動  
嶋田 (1998) によって作成された中学生用の引っ込み思案尺度8項目と攻撃尺度7項目を使用した。これは自己評定による4点尺度である。逆転項目の得点を交換した後で項目得点を加算して合計点を算出した。得点

が高いほど、それらの行動を多く示すことを意味している。  
孤独感

前田（2001）が作成した児童用の孤独感尺度11項目を中学生用に項目表現を変更して、自己評定による5点尺度で実施した。逆転項目の得点を変換した後で項目得点を加算して合計点を算出した。得点が高いほど、孤独感が強いことを意味している。

## 対象

奈良県内の公立中学校2年生3クラスの生徒83名（男子45名・女子38名）のうち、すべての尺度項目に回答が得られた72名（男子39名・女子33名）を分析対象とした。

## 結果と考察

### 性差

社会的スキル、問題行動と孤独感との関係の分析に先立ち、社会的スキル、問題行動、孤独感それぞれの性差について検討した。各得点の男女別の平均値と標準偏差は表1に示した。

社会的スキルに関しては、いずれの下位尺度においても男子に比べて女子に高い得点が示された。そこで各下位尺度得点について対応のないt検定を行った結果、仲間強化 ( $t(70) = -2.92, p < .01$ )、規律性 ( $t(70) = -2.47, p < .05$ ) に有意な差が認められた。また問題行動に関しても同様にt検定を行った結果、男子の攻撃得点が女子に比べて有意に高いことが分かった ( $t(70) = 2.29, p < .05$ )。孤独感に関しては有意な差は見られなかった ( $t(70) = -.01, n.s.$ )。

表1. 各得点の男女別の平均値 ( ) 内は標準偏差

	男子	女子	t値
社会的スキル			
仲間強化	28.08 (6.05)	31.94 (4.99)	-2.92 **
規律性	16.49 (3.07)	18.30 (3.17)	-2.47 *
社会的働きかけ	8.41 (1.97)	8.73 (1.42)	-.77
先生との関係	6.13 (1.61)	6.45 (2.09)	-.75
葛藤解決	9.03 (1.90)	9.73 (1.86)	-1.58
主張性	7.38 (2.21)	7.42 (1.82)	-.08
問題行動			
引っ込み思案	13.36 (4.18)	13.15 (3.68)	.22
攻撃	13.15 (3.43)	11.36 (3.16)	2.29 *
孤独感	20.90 (7.21)	20.91 (6.43)	-.01

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

中学生の社会的スキルと問題行動の性差に関しては、すでに川畑・舟橋・小林・大曲・秦・長井・内山・岡部・森・森田・加藤（1999）によって、女子は男子よりも向社会的スキルに優れ、男子は女子よりも攻撃傾向が強いことが報告されている。これは本研究と一致する結果である。特に本研究では社会的スキルのなかでも、女子は男子に比べて仲間強化と規律性に関するスキルに優れることが示された。仲間強化は「友達が失敗したり、落ちこんだりしている時、はげましたりなぐさめる」「友達の気持ちを考えて話す」といった項目、規律性は「先生の話を中心して聞く」「クラスのきまりを守る」などの項目で表されるスキルである。こうした他者への配慮や気遣い、集団での規律性という側面や攻撃傾向の弱さは女性に期待される性役割（柏木，1997）と一致している。湯川（1990）は、学校場面において期待される性役割を有しているかどうかは適応のための大きな条件となることを指摘している。男女で期待される性役割が異なれば、社会的に受け入れられる行動も男女で異なってくる。その結果、社会的に受容される行動が性別に応じて学習されるのであろう。

先に述べたように川畑ら（1999）の研究は女子が男子に比べて向社会的スキルに優れていることを明らかにしている。彼らは中学生の社会的スキルを「向社会的スキル」という1つの指標から捉えていた。しかし、「向社会的」と呼ばれる行動の中にもさまざまな行動が含まれており、それらはそれぞれ対人関係において異なる機能を有していると考えられる。相川（2000）は、社会的スキルに関する研究を進める際には、できるかぎりビッグ・ワードを避け、評定尺度の下位尺度に焦点を当てるなどして具体的なスキルのレベルで議論を進めることを奨励している。本研究では社会的スキルの指標に中学生の社会的スキルを多面的に測定することのできる渡邊ら（2002）の尺度を用いたため、具体的にどのようなスキルに男女差が見られるのかを明らかにすることができた。この点において本研究は有益な研究資料を提供したものと考えられる。

孤独感に関しては、性差は見られなかった。孤独感の性差について言及している研究を展望した Koenig & Abrams（1999）は、多くの研究が共通して児童期の孤独感には性差が見られないことを報告しているのに対して、青年期以後は男性が女性に比べて高い孤独感を示すことを報告する研究が増加することを明らかにしている。Koenig & Abrams（1999）で展望された研究の中から、本研究と同じく孤独感を自己報告によって測定し、研究対象に中学2年生（13, 14歳）を含んでいる研究を取り上げて検討してみると、15例

中、本研究と同じく有意な性差は見られないとしたものが6例で、男性よりも女性に高い孤独感が見られたのは1例のみ、残り8例は女性よりも男性が高い孤独感を示すと報告していた（そのうち、3例は有意傾向）。ただし、有意な差があったと報告したこれらの研究にはいずれも対象者の中に高校生も含まれていた。

一方、わが国の研究に目を向けると、小学5、6年生を対象とした前田・安藤（2000）や桜井（1992）の研究では孤独感に性差は見られなかった。また、高校生や大学生を対象とした諸井（1985, 1987, 1995）による一連の研究では男性の方が女性に比べて高い孤独感を示すことが報告されていた。したがって、孤独感の性差の出現はわが国においても Koenig & Abrams（1999）の展望と同様の傾向にあるものと考えられよう。すなわち、児童期の孤独感には性差は見られないが、高校生以後、青年期には男性が女性に比して高い孤独感を示す傾向にある。中学生は、ちょうどその狭間の移行期に当たり、孤独感の性差はその他の時期に比べて一貫していないといえる。

#### 社会的スキルと孤独感の関係

社会的スキルと孤独感との関係を検討するためにそれぞれの尺度得点を用いて相関係数を算出した（表2）。その結果、仲間強化、社会的働きかけ、葛藤解決、主張性と孤独感の間にそれぞれ有意な負の相関が見出された。そのうち、最も強い相関が見られたのは社会的働きかけであった。こうした対人関係を開始または形成するためのスキルが孤独感と強く関係することは、従来の大人を対象とした研究においても確認されており、孤独感を低減させるための社会的スキル訓練ではこうしたスキルが中心的に取り上げられてきた（相川, 1996）。本研究の結果は、中学生においてもこうしたスキルが孤独感と最も強く関係することを示唆している。

続いて、男女別に同様の分析を行ったところ、男女で異なる結果が示された。男子に関しては、仲間強化、社会的働きかけ、主張性に孤独感との有意な負の相関が見出された。とりわけ、社会的働きかけとの間には非常に強い負の相関が確認された。女子に関しては、葛藤解決と孤独感に有意な負の相関が示された。

男子において、孤独感との関係が示されたスキルは、対人関係の開始あるいは維持という関係の初期段階において必要となるスキルであると考えられる。それに対して、女子において孤独感との関係が示された葛藤解決は、「他の子におされたりたたかれたりした時に、怒らないで理由を聞く」「友達がいじわるをしたり、悪口をいっている時にやめるように言う」など、関係

がかなり親密化した後で必要となるスキルといえる。榎本（1999, 2000）は、青年期の友人関係において重視される活動は男女で異なり、中学生男子は友人関係において行動を共にすることを重要視し、こうした活動を通して友人関係における親しみの欲求を満たしているのに対して、女子はより親密化した関係においてそうした欲求を満たしていることを明らかにしている。これらの結果を考え合わせると、中学生の孤独感を抑制するスキルには性差があり、男子においては対人関係を開始、維持させるためのスキルが必要であり、女子においては関係性をより深化させるためのスキルが重要となってくることが示唆される。このことから、社会的スキルの訓練を通して中学生の孤独感を低減させようとする取り組みを実施する際には、こうした特徴に配慮する必要があると考えられる。

表2. 社会的スキル、問題行動と孤独感の相関係数

	孤独感		
	全体	男子	女子
仲間強化	-.41 ***	-.53 ***	-.28
規律性	-.08	-.09	-.07
社会的働きかけ	-.50 ***	-.75 ***	-.05
先生との関係	-.04	-.19	.11
葛藤解決	-.30 *	-.19	-.47 **
主張性	-.28 *	-.44 **	-.02
引っ込み思案	.75 ***	.77 ***	.71 ***
攻撃	.18	.15	.23

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

#### 問題行動と孤独感の関係

次に、問題行動と孤独感との関係を検討するためにそれぞれの尺度得点を用いて相関係数を算出した（表2）。その結果、男女を問わず、引っ込み思案と孤独感の間に非常に強い正の相関が示された。引っ込み思案や攻撃はいずれも仲間からの拒否を生みやすいことが知られている（佐藤・金山, 2001）。このことから、引っ込み思案と攻撃はいずれもが孤独感の予測因となると考えられる。それにも関わらず、本研究において引っ込み思案のみに孤独感との関係が示されたのはなぜであろうか。

一つは仲間からの拒否を生む行動が年齢と共に変化してくる可能性である。佐藤・佐藤・高山（1988）は、仲間からの拒否の基準は年齢が上がるにつれて攻撃から引っ込み思案へと移行することが予想できている。また、小林・梶山（1998）は、小学4、5、6年生を対象として社会測定地位指数が低い子どもの行動特徴の変化を横断的に検討し、社会測定地位指数が低い子どもは加齢に伴って引っ込み思案傾向の強い子どもへと移行していくことを示唆している。彼らの研究からは本研究で対象となった中学2年生における状

態を知ることはできないけれども、こうした傾向が続いていくのならば、中学生にとって引っ込み思案であることは攻撃的であること以上に仲間からの拒否を生みやすく、孤独感を生じさせる要因となることが予想される。

引っ込み思案が孤独感と強い関係にあるもう一つの理由は、引っ込み思案な子どもは仲間から拒否されやすいだけでなく、自分から仲間と関わることが少ないことにあると考えられる。一方、攻撃傾向を示す子どもは、仲間と積極的に関わろうとする傾向が強く、実際に引っ込み思案な子どもよりも仲間と一緒にいる時間が長いから、孤独感を感じる事が少ないと考えられる (Burgess, Ladd, Kochenderfer, Lambert, & Birch, 1999)。本研究の結果もこうした点を反映しているかもしれない。

こうした結果が示唆するように、中学生の孤独感への対処には彼らの引っ込み思案傾向に配慮することが重要である。引っ込み思案の子どもに対する社会的スキル訓練の研究成果が示すように、引っ込み思案の改善には対人関係を開始、形成させるためのスキルの獲得が必要であり (佐藤・佐藤・高山, 1998; 山口, 1999), 先の社会的働きかけスキルと孤独感の関係を考え合わせても、中学生の孤独感の対処には社会的働きかけスキルのような相互作用を開始させるスキルの獲得が重要となるだろう。

以上のように、本研究では中学生の社会的スキル、問題行動と孤独感との関係が明らかとなった。ただし、本研究で検討されたのは相関関係のみであり、これらの因果関係については本研究の結果のみから判断することはできない。しかし、相川 (1995) もいうように、両者の因果関係を明確にすることは必ずしも重要なことではない。孤独感の経験は当人に仲間との否定的な関係を繰り返し想起させ、対人接触の場面からの回避を生じさせる。その結果、適切な社会的スキルを学習する機会が減少してしまい、孤独感をますます強めるという悪循環に陥ると仮定される (相川, 1998)。実際、ある縦断研究 (Davis & Franzoi, 1986) の結果は両者に循環関係を示唆している。重要なことはこの悪循環を断ち切ることである。そして、そのためには本研究のように孤独感を社会的スキルという統制可能な観点から捉え、孤独感低減のための社会的スキル訓練に基礎的資料を提供していく必要がある。本研究はわが国の中学生を対象としてこの点に寄与した意義深いものであったといえる。

さて、これまでに社会的スキルと孤独感との関係は多くの研究によって検討されてきた。しかし、それらの研究の多くは、本研究も含めて、自己報告測度を用

いて実施されているものである。社会的スキルの研究には自己報告に加えて他者評定や行動観察など他の測定方法を併用することが必要である (相川, 2000)。したがって、本研究の結果についてもこれらの方法を用いて追試を行う必要がある。

## 【引用文献】

- 相川 充 1992 大学生における孤独感と自尊心, シャイネス, 社会的スキルとの関係 宮崎大学教育学部紀要, 教育科学, **72**, 15-26.
- 相川 充 1995 孤独な人の社会性—社会的スキルの観点より— 二宮克美・繁多 進 (執筆代表) たくましい社会性を育てる 有斐閣選書 pp.133-152.
- 相川 充 1996 孤独感と社会的スキル 相川 充・津村俊充 (編著) 対人行動学研究シリーズ1 社会的スキルと対人関係—自己表現を援助する— 誠信書房 pp.129-145.
- 相川 充 1998 孤独感を低減させる社会的スキル訓練の効果に関する実験社会心理学的研究 平成8年度~平成9年度科学研究費補助金 (基盤研究(c)(2)) 研究成果報告書
- 相川 充 1999 孤独感の低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 社会心理学研究, **14**, 95-105.
- 相川 充 2000 セレクション社会心理学20 人づきあいの技術—社会的スキルの心理学— サイエンス社
- 相川 充・佐藤正二・佐藤容子・高山 巖 1993 孤独感の高い大学生の対人行動に関する研究—孤独感と社会的スキルとの関係— 社会心理学研究, **8**, 44-55.
- Asher, S. R., Parkhurst, J. T., Hymel, S. & Williams, G. A. 1990 Peer rejection and loneliness in childhood. In Asher, S. R. & Coie, J. D. (Eds.), *Peer rejection in childhood*. New York: Cambridge University Press. pp.253-273.
- Burgess, K. B., Ladd, G. W., Kochenderfer, B. J., Lambert, S. F. & Birch, S. H. 1999 Loneliness during early childhood: The role of interpersonal behaviors and relationships. In Rotenberg, K. J. & Hymel, S. (Eds.), *Loneliness in childhood and adolescence*. New York: Cambridge University Press. pp.109-134.
- Davis, M. H. & Franzoi, S. L. 1986 Adolescent loneliness, self-disclosure and private self-consciousness: A longitudinal investigation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 595-608.

- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 榎本淳子 2000 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, 48, 444-453.
- 平田乃美・菅野 純・小泉英二 1999 不登校中学生の学校環境認知の特性について カウンセリング研究, 32, 124-133.
- 平田乃美・渡部 正・相馬一郎 1998 非行少年の学校環境認知とローカス・オブ・コントロール 犯罪心理学研究, 36, 1-11.
- 金山元春・後藤吉道・佐藤正二 2000 児童の孤独感低減に及ぼす学級単位の集団社会的スキル訓練の効果 行動療法研究, 26, 83-96.
- 金山元春・佐藤容子・佐藤正二 2000 児童の社会的スキルと孤独感 宮崎大学教育文化学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, 7, 73-81.
- 柏木恵子 1997 行動と感情の自己制御機能の発達—育児文化との関連で— 柏木恵子・北山 忍・東洋 (編) 文化心理学—理論と実証— 東京大学出版会 pp.180-197.
- 川畑徹朗・舟橋睦美・小林晶子・大曲美佐子・秦 修己・長井ゆかり・内山裕之・岡部恭幸・森 一弘・森田英夫・加藤紀久 1999 一人っ子のライフスキル 神戸大学発達科学部研究紀要, 6, 321-331.
- 河村茂雄 1999 社会スキル不全 内山喜久雄・山口正二 (編著) 実践生徒指導・教育相談 ナカニシヤ出版 pp.84-97.
- King, C. A. & Kirshenbaum, D. S. 1992 *Helping young children develop social skills: The social growth program*. Brooks: Cole Publishing Company. (佐藤正二・前田健一・佐藤容子・相川 充 訳 1996 子ども援助の社会的スキル—幼児・低学年児童の対人行動訓練— 川島書店)
- 小林正幸・梶山千絵子 1998 社会測定地位指数の低い児童が持つ社会的スキルの発達の变化 東京学芸大学紀要, 第1部門, 49, 245-251.
- Koenig, L. J. & Abrams, R. F. 1999 Adolescent loneliness and adjustment: A focus on gender differences. In Rotenberg, K. J. & Hymel, S. (Eds.), *Loneliness in childhood and adolescence*. New York: Cambridge University Press. pp.296-322.
- 前田健一 2001 子どもの仲間関係における社会的地位の持続性 北大路書房
- 前田健一・安藤優美子 2000 子どもの仲間集団における人気度, 友人関係および孤独感 広島大学教育学部紀要, 第三部, 49, 165-171.
- 諸井克英 1985 高校生における孤独感と自己意識心理学研究, 56, 237-240.
- 諸井克英 1987 大学生における孤独感と自己意識実験社会心理学研究, 26, 151-161.
- 諸井克英 1995 孤独感に関する社会心理学的研究—原因帰属および対処方略との関係を中心として— 風間書房
- Peplau, L. A. & Perlman, D. 1982 *Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy*. New York: Wiley. (加藤義明 監訳 1988 孤独感の心理学 誠信書房)
- Perlman, D. & Landolt, M. A. 1999 Examination of loneliness in children-adolescents and in adults: Two solitudes or unified enterprise? In Rotenberg, K. J. & Hymel, S. (Eds.), *Loneliness in childhood and adolescence*. New York: Cambridge University Press. pp.325-347.
- Renshaw, P. D. & Brown, P. J. 1993 Loneliness in middle childhood: Concurrent and longitudinal predictors. *Child Development*, 64, 1271-1284.
- 桜井茂男 1992 小学校高学年における自己意識の検討 実験社会心理学研究, 32, 85-94.
- 佐藤正二・金山元春 2001 基本的な社会的スキルの習得と問題行動の予防 精神療法, 27, 246-253.
- 佐藤正二・佐藤容子・高山 巖 1988 拒否される子どもの社会的スキル 行動療法研究, 13, 126-133.
- 佐藤正二・佐藤容子・高山 巖 1998 引っ込み思案児の社会的スキル訓練—長期維持効果の検討— 行動療法研究, 24, 71-83.
- 嶋田洋徳 1998 小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究 風間書房
- Terrell-Deutsch, B. 1999 The conceptualization and measurement of childhood loneliness. In Rotenberg, K. J. & Hymel, S. (Eds.), *Loneliness in childhood and adolescence*. New York: Cambridge University Press. pp.11-33.
- 山口 創・佐藤健二・岸 太一 2000 臨床社会心理学への展望 カウンセリング研究, 33, 69-81.
- 山口正二 1999 引っ込み思案 内山喜久雄・山口正二 (編著) 実践生徒指導・教育相談 ナカニシヤ出版 pp.61-73.
- 湯川隆子 1990 性役割 無藤 隆・高橋恵子・田島信元 (編) 発達心理学入門II—青年・成人・老人— 東京大学出版会 pp.46-60.
- 渡邊朋子・岡安孝弘・佐藤正二 2002 子ども用社会的スキル尺度作成の試み(1) 日本カウンセリング学会第35回大会発表論文集, 93.

【謝 辞】

本研究を実施するに当たり、ご協力を賜りました学校関係者の皆様、生徒の皆様に感謝申し上げます。

また、本論文の作成に当たり、ご指導いただきました

た広島大学大学院教育学研究科教授前田健一先生にお礼申し上げます。

(主任指導教官 松田文子)